

孤りのための空間

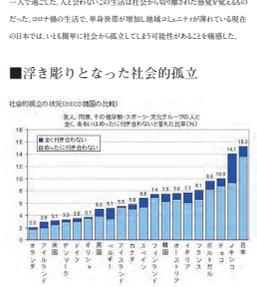
— 社会的孤立と地域の接点となる居場所の構築 —



01. 背景
コロナ禍、1人で過ごす時間が多かったこと
Background

■人と会わない62日

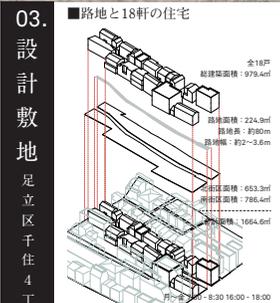
日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0



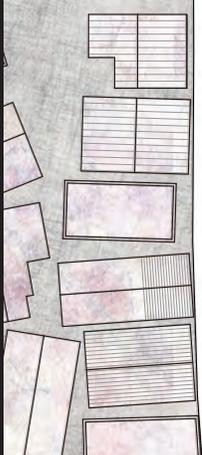
■「孤り」のための空間とは？

日本の住宅はプライバシーを重視し、外部との繋がりが少ない、外から見えず、家の中に隠れた「孤り」に対して建築的提案を行うことで、社会的孤立解消の糸口となる一人一人が豊かに暮らすことが都市空間をつくる目的とする。

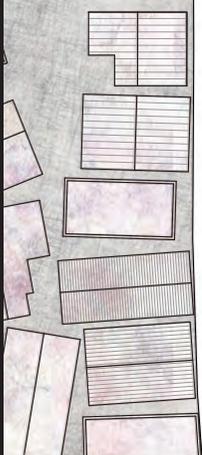
ひとりの事例を収集し分析すると、他者分析するべき空間のひとりの空間だけでなく、小さなスケールの空間を使いこなすことによって他者との関わり合いの可能性を持った空間のひとりの空間が存在していることに気づく。



■3階平面図



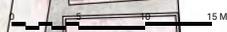
■2階平面図



■1階平面図



- リビング・ダイニング・キッチン
- 個室
- 洗面・浴室・トイレ
- 外部
- 共有部
- 物置
- 資材
- シェア個室

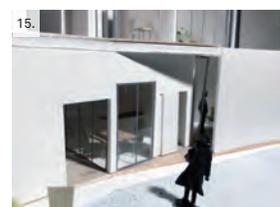
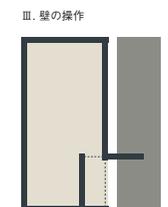
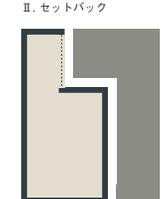
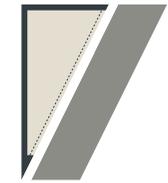


■見えてくれる「孤り」の居場所



建物の緩やかなカーブが景観(住宅や既存の街内)のある住宅の正面、端によってこの路線を歩いている場所や視線の方向によっての外部の居場所が見えわたれる。この視界の変化を繰り返し、孤りの居場所が周囲から見えわたれるように「ホーム」を配置する。

I. 斜め



11. N-i 1階小ホール

人が引込み、集まった隠れた居場所をつくった階段。

12. S-g 1階

敷地に合わせて斜めに付いた壁の隙間が抜け、ゆるやかな集会所。

II. セットバック

13. N-l 2階

路地からセットバックした2階デッキを一体に見せる居場所。

14. S-f 2階

壁との間に住まれる一人で過ごせる居場所に2階から光が入る。

III. 壁の操作

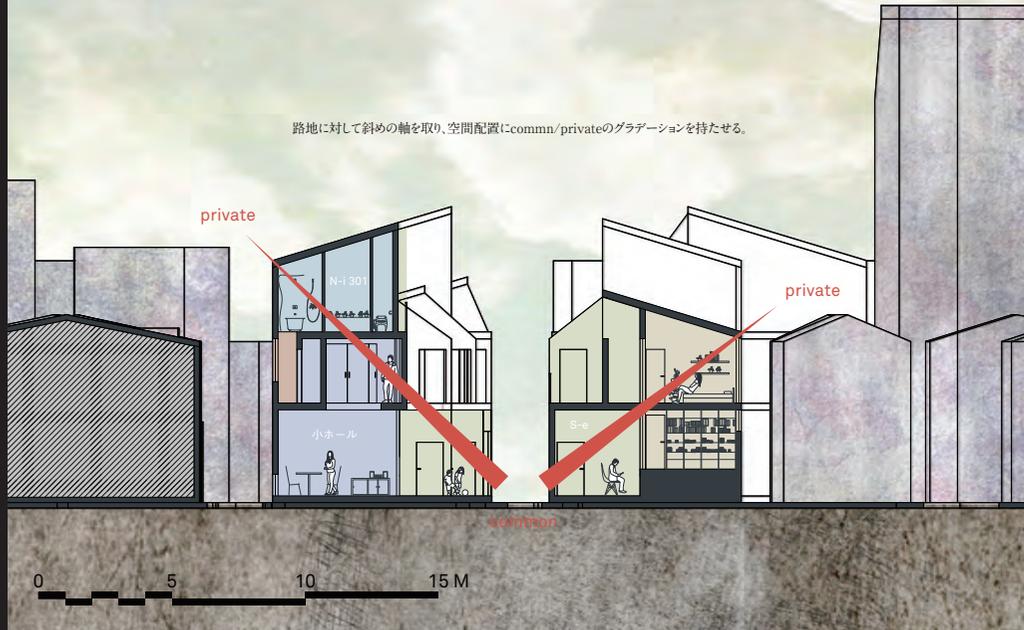
15. S-f 1階

路地を歩くと開口部から個室へ視線が通る間がある。

16. S-e 2階

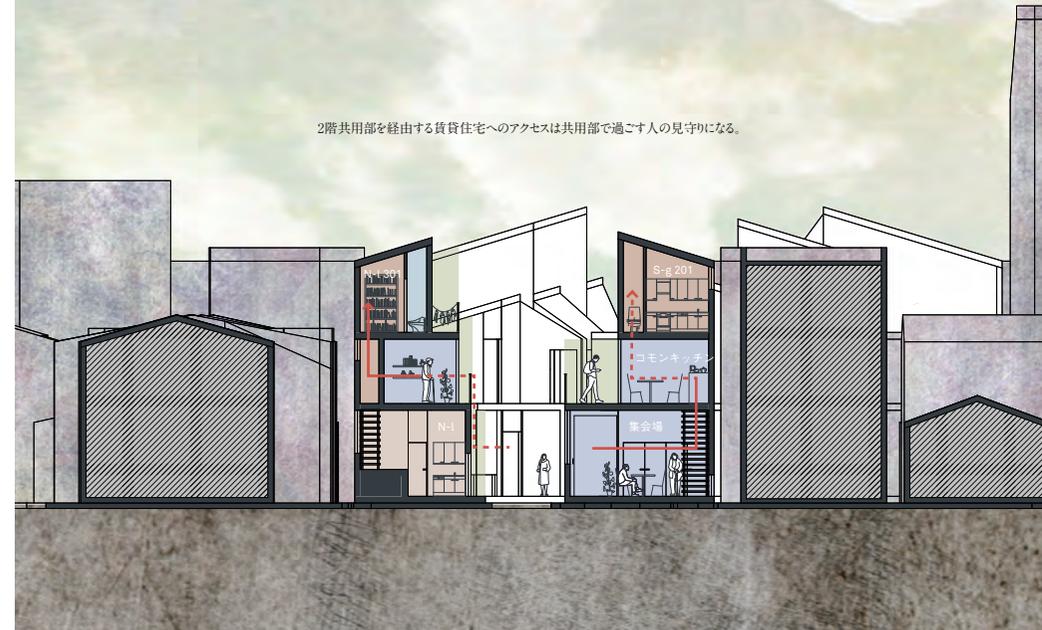
自宅と路地の間の中間領域となる小さな居場所が生まれる。

■路地と建築の関係 : B-B 断面図



- リビング・ダイニング・キッチン
- 個室
- 洗面・浴室・トイレ
- 外部
- 共有部
- 物置
- 質疑
- シェア個室

■立体動線による見守り : B-B 断面図



路地を介して孤りが地域と一緒に暮らしていく

